

上腸間膜動脈周囲の三次元構造の研究:
膵癌における上腸間膜動脈神経叢を温存したリンパ
節完全郭清の可能性について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/14967

学位授与番号	医博甲第1045号
学位授与年月日	平成4年3月25日
氏名	森 和 弘
学位論文題目	上腸間膜動脈周囲の三次元構造の研究 — 膵癌における上腸間膜動脈神経叢を温存したリンパ節完全郭清の可能性について —
論文審査委員	主 査 教 授 宮 崎 逸 夫 副 査 教 授 中 沼 安 二 教 授 渡 辺 洋 宇

内容の要旨および審査の結果の要旨

膵癌においては後腹膜とくに上腸間膜動脈周囲への腫瘍の進展がしばしば認められ、根治手術を目指す上で最大の障害となっている。教室では膵癌の治療成績向上をめざして、積極的に上腸間膜動脈神経叢を含めた上腸間膜動脈周囲の完全郭清を施行してきた。その結果、これら拡大手術施行例の中から長期生存例も認めるようになってきた。しかし、上腸間膜動脈神経叢の完全郭清例は、重篤な下痢を伴った消化吸収障害を合併し長期にわたる止痢剤の投与と栄養管理を必要とする場合が多い。このため上腸間膜動脈神経叢郭清の適応を明確にし、過不足のない適切な郭清が望まれる。しかし、上腸間膜動脈周囲における神経叢の構造やリンパ節の分布や癌の進展様式に関してはいまだ不明な点が多い。そこで本研究では、上腸間膜動脈周囲組織構造および膵癌の上腸間膜動脈周囲への進展様式をあきらかにすることを目的として、病理組織学的かつコンピューター・グラフィックスを応用して三次元的に検討し、膵癌の外科治療における神経叢を温存した上腸間膜動脈周囲リンパ節の完全郭清の可能性を追求した。

正常剖検例3例、膵頭部癌切除例2例、膵頭部癌剖検例1例の計6例を対象として、これら6例から得られた膵頭部標本から上腸間膜動脈根部から約5cmにわたり厚さ5 μ mの完全連続切片を5,492枚作製した。まず、これら組織切片に対して血管およびリンパ管の鑑別を目的として弾性線維染色、血管内皮染色、基底膜染色を施行し、リンパ管、リンパ節の分布および神経叢の走行に注目して組織学的に検討した。さらに、上腸間膜動脈周囲におけるリンパ節、神経束の分布および癌の進展様式をコンピューター・グラフィックスを応用して三次元再構成によって画像化し検討した。得られた結論は以下のごとく要約される。

- 1) 上腸間膜動脈神経叢内にリンパ節は認めず、リンパ管も上腸間膜動脈神経叢の外側に分布するものが多かった。
- 2) 膵癌の進展様式としては主に神経叢内を神経浸潤により進展するものと主にリンパ節転移により進展する二つの進展様式が認められた。

以上より本研究は、膵癌において上腸間膜動脈神経叢を温存した上腸間膜動脈周囲リンパ節の完全郭清が可能であることをしめた。すなわち本研究は膵癌の外科治療学上価値ある労作と認められた。